

## 第2次世界大戦前後のアメリカ人研究者による 日本村落の研究

文  
桑山敬己

共同研究 ● 海外における人類学的日本研究の総合的分析 (2010-2013)

### 忘れられた外国人の村落調査

1930年代から50年代にかけて、多くのアメリカ人研究者が日本を訪れて村落調査を行った。第2次世界大戦後の数十年間は、農民 (peasant) 研究が世界各地で大きな注目を集めた時代であった。だが、近代化の進展による産業構造の変化とともに、この分野は徐々に顧みられなくなった。特にアメリカによる日本村落の研究は、一部を除いて日本語に翻訳されなかったため、調査した側と調査された側の双方で忘却されつつある。しかし、調査地の多くは数度の市町村合併によって地図から姿は消したものの、実態として今日まで存続している。ここでは3冊の本を取り上げて、現代的観点から振り返ってみたい。これは海外における人類学的日本研究の再評価をめざす本研究にとって重要な作業であり、泉水英計氏 (神奈川大学)、中西裕二氏 (日本女子大学)、そして桑山の3人が担当している。

### Arthur Raper, et al., *The Japanese Village in Transition*, GHQ, SCAP, Tokyo, 1950.

本書は、占領下の日本において、農村社会学者でアメリカ農務省の局長だったA. レイパーらが、北海道から九州まで13の村落における農地改革の影響を調べた報告書である。短期間の集中調査だったためか、調査された事実さえ記憶されていない村落がほとんどである。

興味深いのは、戦後の社会学、人類学、民俗学を牽引した日本の代表的研究者が関わったという事実である。1952年の『民族学研究』(第17巻、第1号)に掲載された「特集 社会調査」によると、レイパーには喜多野清一と小山隆らが同行し、調査で大きな役割を果たした後のコロンビア大学教授H. パッシンには鈴木栄太郎と関敬吾が同行したという。さらに、その後は桜田勝徳や竹内利美らも加わり、豪華な顔ぶれであった。

しかし、喜多野たちがこの調査を後世に語り継ぐことはなかった。進駐軍に協力したという罪悪感があったことは想像に難くないが、本調査は戦後日本を舞台にしたネイティブと非ネイティブの協同作業の走りだった、という事実は注目に値しよう。もちろん、当時の日本は占領下の敗戦国で、上述の特集で関と小山が指摘したように、アメリカ主導の調査そのものが権力の行使であり、調査地の農民に脅威を与えたことは否定できない。重要なのは、そうした問題は、ベトナム戦争の最中にD. ハイムズらが訴え、後にE. サイドの『オリエンタリズム』で最高潮に達した「知と権力」の議論を先取りしたものであったということだ。

レイパーの調査の政治的背景はさておき、本書には統計、写真、地図が数多く掲載されていて、当時の日本村落を知る貴重な記録となっている。また、日本人研究者が方法論的に学んだことも少なくなかったようだ。進駐軍の生々しい記憶が過去のものになりつつある今日、本書を冷静に検討してみる価値はあるだろう。

### John Embree, *Suye Mura: A Japanese Village*, University of Chicago Press, 1939.

本書は言わずと知れた外国人による日本村落研究の古典である。ここでは、これまで見過ごされてきたことや、未解決の問題について述べる。

(1) J. エンブリーは、かのA. R. ラドクリフ=ブラウンがシカゴ大学に在職中だったときの学生で、*Suye Mura*には師の序文がついている。この本が刊行された1939年は、偶然にも費孝通の*Peasant Life in China*が書かれた年で、同書にはB. マリノフスキーが序文を寄せている。1939年をもって東アジアにおける機能主義の幕開けとすることは、あながち奇をてらった言い方ではないだろう。

(2) エンブリーに影響を与えたのはラドクリフ=ブラウンだけではない。第5章「社会階級とアソシエーション」の分析は、当時シカゴ大学にいたL. ウォーナーの有名な6階級システムを当てはめたものである。また、エンブリーは行政村としての須恵村と近代国家日本の関係に注目していた。その点で、農村と都市の関係を重視し、農村を「部分社会」と位置づけたシカゴ大学のR. レッドフィールドの影響も見とれる。

(3) 須恵村 (現在の熊本県球磨郡あさぎり町須恵) は、柳田國男の『後狩詞記』の舞台となった椎葉村と、直線距離で僅か40キロほどしか離れていない。エンブリーは来日後に柳田から助言を得たと述べており、彼の調査が行われた1935年と36年は、柳田民俗学の基礎を築いた『民間伝承論』と『郷土生活の研究法』が世に問われた時期であった。外国人の日本研究に敵意に近いものを感じていた柳田は、アメリカから来た若者の調査をどのように眺めていただろうか。

(4) エンブリーの妻エラ (夫の死後再婚して、ウィズウェル姓を名乗る) は日本育ちで、熊本弁も解したと言われる。そのエラが女性の目で見えた村の生活を編集したのが*The Women of Suye Mura* (1982) である。この本と*Suye Mura*の関係は、男のクラを描いたマリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』と、女の交換財としてのバナナの葉と腰巻を描いたA. ワイナー (元アメリカ人類学会会長) の*Women of Value, Men of Renown* (1976) に相当しよう。残念ながら、アメリカ人類学における日本研究は周辺化されているので、エラの本のインパクトは限られていた。

(5) *Suye Mura*には日本語訳がある。植村元覚訳『日本の村落社会：須恵村』(1955)がそれである。しかし、同書は翻訳というより抄訳で、原著者の言葉と訳者による要約が混在している。さらに、まったく訳されていない部分が多々あり、どのような基準で省略したのか皆目見当がつかない。おそらく、当時の日本人読者にとって常識的な箇所を省いたのだろうが、時の経過とともに自文化は異文化になる。だからこそ、外国人の記述が後世の自国人にとって貴重な記録となるのである。*Suye Mura* 刊行から70数年が経つが、本書はいまだにその全容を日本人の前に現わしていないと言ってよい。



須恵村にあるエンブリー住居跡の記念碑。夫妻が住んだ<sup>かくい</sup>覚井集落には商店街があり、同じ須恵村にある農林業中心の集落とは趣が異なった。エンブリーはこうした村内の多様性および *mura* (行政村) と *buraku* (自然集落) の緊張関係に着目した (2011年3月12日、泉水英計撮影)。

**Richard Beardsley, John Hall, and Robert Ward, *Village Japan*, University of Chicago Press, 1959.**

1947年創設のミシガン大学日本研究センターは、1950年に岡山市に分所を設置した。そして、同市および周辺地域の農村、山村、漁村で長期調査を行い、55年に閉所した。本書はその成果の一部で、調査規模と民族誌的詳細において、英語圏における日本村落研究で右に出るものはない。残念ながら日本語訳はないが、ミシガン・プロジェクト終了後、アジア財団の援助で農業機械化に関する大規模な調査が日本人によって行われ、1960年には岡田謙・神谷慶治編『日本農業機械化の分析』が上梓された。私はその調査地（現在の岡山市北区新庄上に位置する新池<sup>にいけ</sup>集落）で1986年に博士論文調査を行い、2010年から調査を再開した。以下、その過程で浮かび上がった1つの大きな問題について述べる。

それは調査単位の問題である。新池は新庄上という大字に位置する集落で、新庄上は1889年の町村制施行によって誕生した加茂村を構成する5つの大字の1つであった。つまり、近代以前には新庄上が1つの村を成していたのである。その加茂村は1955年に高松町に合併され、高松町は1971年岡山市に統合された。そして2009年、平成の大合併により高松地区は岡山市北区となった。*Village Japan*の調査時、新池はすでに加茂村の一部となって久しかったが、著者は自然集落としての新池の社会関係に集中して、集落外との関係はあまり問わなかった。しかし、私の実感では、1986年も現在も新池の基本的生活圈は旧加茂村とその周辺の商業地区（旧高松町の中心地）である。こうした事実を象徴するのが加茂小学校で、同級生関係は現地に住み続ける限りほぼ一生涯続く。

一方、須恵村の誕生は加茂村と同じ1889年だが、大字は1つしかないのが、近代以前の須恵村と地理範囲はほぼ重なる。エンブリーの調査時には17の集落があり、彼が居を構えた集落 (*buraku*) には商店街があった。そのため、エンブリーは須恵村の集落を「水田」、「丘陵」、「山村」、「商店」の4つの範疇に分類して、集落間の差異つまり村内の多様性に注意を払った。さらに、彼は行政村としての須恵村が国家の方針に影響され、自然集落を犠牲にする形で村が統一されていく過程を強調した。広範囲の調査だったからこそ見えた側面と言えよう。*Village Japan*になぞらえれば、エンブリーは新池集落ではなく旧加茂村を取り上げたのである。

理由は定かではないが、英米圏の村落研究は圧倒的に集落を調査単位としたものが多い。それは集落という小宇宙で展開される日本人の生活を微細に描き出すことには成功したが、近隣の集落や旧町村との関係はもちろん、より大きな外の世界との接触を見逃す要因となったように思われる。脱農業化が加速的に進展するグローバル化時代にあって、集落が1つの完結した共同体を形成することはないので、今後の村落調査にはまず対象地域と視点の拡大が求められるだろう。

**くわやま たかみ**

北海道大学大学院文学研究科教授。カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) 在学時に、岡山市の農村で博士論文調査を実施。帰国後、永住権を放棄して日本に拠点を移し、英語圏における日本研究を批判的に検討。主著は *Native Anthropology* (Trans Pacific Press 2004)、『ネイティブの人類学と民俗学』(弘文堂 2008年)。